

ベルリンに佐藤進の足跡を求めて —140年後 ある頭蓋骨の再発見？

BEATE WONDE*

ドイツで医学博士号を取得した最初の日本人である佐藤進の名は、日独関係史の医学の分野において重要な位置を占めているにもかかわらず、今日、医学史研究者以外にはほとんど知られていない。順天堂大学とベルリンのシャリテは2011年以来協力関係を結んでいるが、歴史的に両者を結びつけるのもやはり進である。今日順天堂からベルリンに留学してくる学生は日本とベルリンの間に続く学術交流の長い鎖にもう一つの環を加えている。ベルリンは明治時代を通じて、日本人が訪れることのもっとも多い都市であった。そのことを知っていてもいなくても、青年たちは、ベルリンのどこに行っても、歴史をたっぷりと孕む土壌の上を歩いているのであり、彼ら自身、その土壌の一部なのである。外国に来て、先駆者の学習意欲と経験の痕跡にたえず触れられることは有益であるに違いない。

キーワード：順天堂とシャリテ，日独医学交流，先駆者の留学体験—森鷗外と佐藤進，歴史的遺物：頭蓋骨の発見

私が佐藤進のことを調べている理由は、進が森鷗外^{*1}と遠い縁戚関係にあるからというだけではない。鷗外の最初の妻、赤松登志子^{*2}の祖母、つるは、順天堂大学の創立者、佐藤泰然の娘である。ちなみに進は、鷗外と登志子の結婚披露宴にも列席している^{*3}。

進と鷗外が、それぞれ別の時に、同じドイツ人や日本人と交渉があったことも、2人を結びつける興味深い関係である。たとえば鷗外は進の師であるルドルフ・ウィルヒョーをたびたび訪問して、その家で東大の学友であった三浦守治に会ったり、論文発表のために助力を得たりしている。一方、進は1889年10月18日に鷗外の師エルヴィン・ベルツとともに、超国家主義団体である玄洋社による暗殺計画に遭った大隈重信の治療にあたった^{*4}。1886年2月20日には鷗外がある医学総会でベルリン時代の進の師バルデレーベンに会う^{*5}。2人とも青木周蔵、長井長義、橋本綱常、石黒忠恵と親交があった。北白川親王は台湾で鷗外とともに戦い、没後、鷗外が伝記を書くのだが、ベルリンで進とともに学んでいた。このようなつながりはまだまだ列挙できるが、ここではこの程度にとどめ、将来書物の形で詳細に述べることにしたい。まずはベルリンに進の足跡を辿ろう。私は数年来この作業にあたって、これまで知ら

れていなかった資料をいくつか見出したので、日独交流150周年を機に、ここに発表したい。

佐藤進という名を、1970年代、日本学科の学生時代から私は知っていた。ラテン語の博士号授与証書の、A3判の大きなコピーが、私の入学時にすでに日本学科の公文書の中に収められていた^{*6}。日本学科が移転するまでのしばらくの間は、額に入れて壁に飾られてもあった。進が何者であるかを知る前に、その名の奇妙な書き方を、私は何年も見つめていたことになる。つまりは、日本で医学を学ぶ者がロベルト・コッホを知らないではすまないように、フンボルト大学の日本学科の学生は、ドイツで博士号を初めて取得した日本人、佐藤進の名を知らずにはいられなかったのである。

私の勤務先である森鷗外記念館は鷗外の生涯と活動を主たる研究対象とするが、明治時代の独特な日独学術交流史のなかでそれを考えようとしている。当時、知識欲に燃える日本人学生の留学先は王立フリードリヒ・ヴィルヘルム大学、略称ベルリン大学、現在のフンボルト大学だった。森鷗外記念館はその附属研究所である。ルドルフ・ハルトマン博士は当時の大学入学手続き書類を分析し、「ベルリン在住日本人」の経歴を調査してきたが、その報告によれば、1870年から1914年までにベルリン大学に正式に入学手続きをして学んだ日本人は747人しかいない^{*7}。森林太郎（鷗外）と北里柴三郎の名はこのリ

*ベルリン森鷗外記念館
〔Feb. 5, 2013 原稿受領〕

ストに載っていない。正規の入学手続きは取らなかったことがわかる。ハルトマンが後に、広義の日本人学生、つまり軍人や正式の手続きを経ない学習者にまで拡大したデータファイルには、同期間にドイツにいた2,700人弱の日本人名が載っており、佐藤姓の学生が合わせて25名いる。その1人は進の子、達次郎(1868-1959)である。このデータファイルは印刷されていないが、国立図書館プロイセン文化財団のクロス・アジア・データバンクで見ることができる^{*8}。

後者の大きいほうの人名リストから、1869年から1874年、つまり進と同時期にベルリンに滞在していたベルリン同期生ともいべき人々を拾ってみると、26人もいる。なかでも高名なのは青木周蔵、荒川邦蔵、伏見宮(北白川宮)能久親王、萩原三圭、橋本綱常、平田東助、池田謙斎(秀之)、今井(岩佐)巖、桂太郎、北尾次郎、熊沢善庵、松野礪、長井長義(直安)、ビール醸造家の中川清兵衛、大澤謙二、柴田承桂、辻春十郎、山脇玄である。同期生の2人はベルリンで死亡した^{*9}。当時ヨーロッパに滞在することはそれほど安全ではなかった。

進がベルリンからの手紙に記している名のうち、1名がハルトマンのリストに載っていない。日本からの最初の留学生の1人、伊東方成^{*10}という人物である。

統計に表れない数値は常にある。インターネット上のこのリストの補充拡大も現在進行中の作業と考えられる。医学史家や、明治時代の日本とヨーロッパとの学術交流の研究者が、できるだけ多数この作業に参加されることを望みたい。

山県有朋(1838-1922)もこのリストからもれている。後に陸軍大将、首相になる山県はヨーロッパ調査研究旅行中、1869年からベルリンに滞在した。1870年には青木周蔵とたびたび会い、長時間話合ったという。山県はベルリンで日本軍隊をドイツに倣って組織することを立案した。山県との会話が、青木が医学から国家学に研究分野を変える一因になった^{*11}。青木と以前、あるいはこの時期もなお同居をとともにしていた進が、青木とこのように近しかった山県に会っていないとは考えにくい。山県が鷗外の人生に与えた影響^{*12}は、『舞姫』の読者の誰しもが感じ取るところである。作中の天方伯のモデルが山県であることは広く知られている。1888年12月、山県は再度のヨーロッパ旅行に、今度は鷗外の親友、賀古鶴所^{*13}を伴って出発した。鷗外はすでに帰国している。鷗外はベルリンで山県に会っていない^{*14}。しかし進は確かに山県と同時期にベルリンに滞在していた。

進が鷗外のような日記マニアであったなら、もっ

と詳しい事実がわかったであろう。実のところは、ベルリンから日本の家族宛に書いた少数の手紙^{*15}、ベルリン大学での勉学に関する文書、そして新聞記事一つ以外に、信頼できる個人的な記録がない。当時の歴史文書から、ベルリン滞在中の進の状況をパズルのように組み立てるしかない。

まずは、明治期学生の知識欲を思い浮かべてみよう。鷗外が夜、2~3時間しか睡眠をとらなかったことはよく知られている。福澤諭吉(1835-1901)も学生時代から同様の最小限の睡眠時間で済ませていた。夕食後22時まで横になって眠り、それから起きて書を読む。朝、飯を炊く準備の音が聞こえると、もう一度、少時眠り、朝風呂を浴び、朝食を摂り、読書を続けたという^{*16}。有名人ではナポレオン、ミラボー、アレクサンダー・フォン・フンボルトも睡眠時間の短いことで知られる。このことは、福澤がシャリテを見学した初期の日本人の1人であり勉学熱心という日本人像の形成に寄与したという限りで重要である。後に進がこの日本人像を実証する。福澤は医学の分野では進ほどの経験を積んでいなかった。進はドイツに渡る前に、佐倉順天堂で、また戦乱中に負傷者を治療して、実地の経験があった。福澤は1862年にヨーロッパに派遣された幕府使節の一員だった。医師も数人加わっていた。彼らはベルリン滞在中に、ほかのヨーロッパ諸国の学生が勉強に来ていることに気づき、ベルリンで医学を学ぶことは有益であると判断した。福澤は日記に、1862年7月14日にベルリンに到着、眼科の手術に立ち会ったことを記している。だが彼は、気分が悪くなり、途中で退出しなくてはならなかった^{*17}。

その頃ベルリン医学界の中心はルドルフ・ウィルヒョー^{*18}、ヘルマン・フォン・ヘルムホルツ^{*19}、アルブレヒト・フォン・グレーフェ^{*20}だった。

福澤が見学したのはたぶんグレーフェの手術で、彼は19歳で医学部を卒業し、神童といわれていた。22歳で集合住宅の2部屋を借りて診療所を開設した^{*21}。1857年にグレーフェが緑内障治療の可能性があると発表すると、その診療所には、教えを請う眼科医と、治療を請う患者が世界中から押し寄せた。彼は自身の身体で試したうえで、エーテル麻酔をかけて手術した。この麻酔法を、シャリテの保守的な古株枢密顧問官たちの反対を押し切って、ウィルヒョーが支持した。後にグレーフェは白内障の手術法も開発した。今日でも「グレーフェ手術」の実習は眼科の学生には必須である。この天才眼科医は1870年7月20日にわずか42歳で亡くなった。今日なら過労死と診断されるところであろう。グレーフェは数え切れない数の患者の視力を救ったが、シャリテの有力な保守派の外科医ユンケンに石

炭酸の殺菌力を信じさせることはついにできなかった。グラスゴーではヨーゼフ・リスターがすでに石炭酸を使用して驚くばかりの治療成果をあげていた。事態が変わったのは、1868年に進の師、フォン・バルデレーベンがシャリテの教授になり外科診療を担当してからである。バルデレーベンはその直前に、エディンバラに移っていたヨーゼフ・リスターの下で、傷治療法を直接習ってきていた。グレーフェの記念碑はベルリンに建てられた科学者の記念碑として最初のものである。今もシャリテの入口で革新的精神と官僚制に対する戦いを、見る者に思い起こさせている。

進が、グレーフェの生前最後の半年の間に彼と面識を得た証拠はない。だが進のベルリン到着時にはだれもがグレーフェの名を口にしていた。グレーフェが設立した「ベルリン医学協会」におけるグレーフェの地位を、彼の死後は盟友であり、また進の師でもあったルドルフ・ウィルヒョーが、その後ベルンハルト・フォン・ランゲンベックが引き継いだ。「ベルリン医学協会」の「ランゲンベック・ウィルヒョー館」*22はLuisenstraßeのシャリテ大学病院と面した所にあり、2010年にここで世界保健会議が開催された。順天堂とシャリテ大学病院による第1回日独シンポジウムも、プログラムの一部だった*23。

進は、妻、志津宛の手紙*24に、1869年9月6日にベルリンに着いたと書いている。当時日本ではまだグレゴリオ暦は使われていないので*25、今日の計算でいうなら、10月はじめ、秋の最中に到着したことになる。ベルリンは寒い、と感じたのも道理で、10月22日の諸新聞は初霜と、この季節にしては「異常な低温」を報じた。日本では一番心地よいはずの季節に零下の気温に出くわして、進もさぞ驚いたことであろう。

10月15日に大学で学長交代という事件があった。医学枢密顧問官、医学博士、エーミール・ハインリヒ・デュ・ボア・レイモン教授*26がベルリン大学の新学長に就任した。1869年の学生数も新聞記事からわかる。この年に入学手続きをしたのは、神学部191、法学部454、医学部218、哲学部505、計1,368名の学生、卒業したのは1,367名で、比率は入学者とほぼ同じである。医学生は多数派ではない。

気持ちのよい部屋を借りた、と進は書いている。2人の学生と同居している。1人は長州、もう1人は土佐の出身である。進は名前を書いていないが、青木周蔵と萩原三圭である。2人とも進より先にベルリンに来ていた。進は、ベルリン滞在は自分の進路、学問、そして日本国のために重要である。ベルリン

では様々なことが起こっている……と書き続ける。石原あえかは、この初めての「共同生活」は基礎学校教師マースの家で行われた、と書いている*27。マースが3人の日本人学生に、大学入学許可の前提となるドイツ語教育を授けた。

1869年のベルリンの住所録はない。1870年の住所録にはマースという教師が3人載っているが(図-1)、基礎学校教師ではない。女教師Th.マースという名もあるが、Großen Frankfurter Straßeという住所は大学のある都心からは遠いし、3人の日本人青年が一人暮らしの女性の家に住むということも考えにくい。マースJ. <教区教師?> Neuenburger Straße 41 IV (5階) とマースM.J.教授、<タイプライター、速記教師> R.u.J., Brüderstraße 38. III. 9-3, 5-7が残る*28。この2つの住所は都心のLeipziger Straßeの北と南にあり、Brüderstraßeのほうはベルリーナ・シュロスに程近い。

入学手続きの時点では3人はそれぞれ別の、いずれも都心の住所を届け出ているので*29、共同生活は解散して、各自の住まいを借りたのであろう。家

W.

- Maack, D.**, Metallbrecher, Mehnerstraße 23. II.
- Ch., Brennmaterialhändler en gros u. en détail, Wollanstr. 21. H.
- Maag, F.**, Geh. Secretair beim geistl. Ministerium, Brunnenstr. 112. I. —
- Maaf, J. F.**, Cafetier, Waldemarstraße 19. E. Pr.
- J., Porzellanhändler, Alte Infobstraße 5. S.
- J., Schuhmacher, Dragonerstr. 45. IV.
- Maanß, G.**, geb. Pfeiffer, vw. Meut., Wilhelmstr. 140.
- Maas, J. a. Maas.**
- J., Gemeinde-Schreier, Neuenburgerstraße 41. IV.
- H., Königl. Mundfisch, Albrechtsstraße 16a: II.
- B., Corset-Fabrikant, Aurstr. 36. E. I.
- M. J., Kaufmann, Ritterstr. 11. III. 2-4.
- J., Kaufmann, Mohstr. 30a. II.
- C., Kaufmann, Wulfovstr. 7. II.
- M. J., Professor, Schreib- und Steuergeschäft, R. u. J., Brüderstraße 38. III. 9-3, 5-7.
- Gustav, Tapezierer, Zimmerstr. 80. I.
- G., Rollen-Fabrik und Tapiserie-Manufactur, Mohstr. 30a. II. Geschäftloca: Köpenicker Fischmarkt 4. E. I. F. Adolph Maas u. Co. 8-9.
- Maas, J. a. Maas.**
- H. F. G., Stadtgerichtsrath, Ritterstraße 43. I.
- H. F., Rechnungsrath, R., Karlsstraße 2. II.
- C. F. B., Geh. exped. Secretair u. Calculator im Finanz-Ministerium, Invalidenstr. 66a. I. 3-4.
- B., Polizeibeamter, Christinenstr. 5. III.
- J., Briefträger, Antlamerstr. 15.
- G., Postbeamter, Blumenstr. 47.

図-1 1870年のベルリン住所録
マース姓で始まる先生の住所（進の最初の下宿の大家は「マース」という姓の学校の先生であった）。



図-2 マウアー通り22番にある進のベルリンでの3番目の下宿
(撮影：ペアーテ・ヴォンデ)

に帰れば日本語で暮らす、ということのを避けるにはよい方法である。進の最初の住所Französische Str 58は、今は駐車場になっている。次に住んだMauerstraße 22の建物は近年の再開発で修復され、日を浴びて感じのよいクリーム色に輝いている(図-2)。1874年の住所録によれば、この建物には工場主2人、未亡人2人、靴職人2人、パン焼き職人1人、石工1人、商人1人が住んでいた。進はだれのところに間借りしたのだろうか。

第一世代の日本人留学生が主に住んだのは、ウンター・デン・リンデンの南、ジャンダルメンマルクト周辺だった^{*30}。長井長義^{*31}も最初のベルリン滞在時にはジャンダルメンマルクトに隣接するTaubenstraße 15に住んだ。その後80年代に、鷗外を含む、ずっと多数の日本人留学生第二世代がベルリンに来る頃には、この地域の住居費は学生には手が届かないほど値上がりしており、ウンター・デン・リンデンの北、フリードリヒシュトラセ駅の裏あたりに彼らは間借りする。ちょうど、Ziegelstraßeにある、医学部を含む大学本館と、SchumannstraßeとLuisenstraßeにまたがるシャリテとの間の位置である。

この、かつてのベルリン・カルチュ・ラタンの中心部に現在、森鷗外記念館がある。入口はLuisenstraßeに面している^{*32}。

伝記^{*33}が語るところでは、進は入学手続きまでの日にちを、ドイツ語で「民衆の口を見る」というが、つまりドイツ人と日常的に接触することを通じ

て、つまり居酒屋や劇場で会話に加わったり、時には聴講生としてベルリン大学の講義を聴いたりすることで、実地にドイツ語を習得していった。

同1869年12月4日にデュ・ボア・レイモン学長がフンボルトの記念碑建立のための寄付を呼びかけ、12月9日にはクララ・シューマンがベルリンで演奏会をする。進が初めて迎えるクリスマスに、新聞は「きよしこの夜」の大嵐を予報する。

1870年が始まり、ドイツの新聞は、1861年に署名されていたプロイセンと日本との日普修好通商航海条約がいよいよ実施されるとして、その条項を報じた^{*34}。同時に、日本で40人の反逆者が残虐に処刑されたという大きな記事も載った。この記事を読んだ人々はきっと日本人学生を遠ざけようとしたに違いない^{*35}。当時から外国で暮らす学生は常に、メディアが描くイメージや一方的な報道と向き合い、ときには真実を説明しなければならなかった。それから15年後、鷗外は「ナウマン論争」において、初めて偏った異文化の報道について異を唱えたのである。決して近年だけの現象ではないのである。

その一方では日本への関心が高まっていた。1870年3月12日にバステアン博士(後に森鷗外がウィルヒョーの紹介で会い、「日本の住宅」について書いた論文の刊行を依頼することになる)がジングアカデミーで「仏教徒の世界観」という講演を行う。

1870年6月にウィルヒョーは、14歳児の喫煙が健康を害することを学校に訴える。同じ6月に50,000人のユダヤ人が信教と良心の自由を求めて国会に請願する。日本でキリスト教禁止が解かれるのは1873年である。

進の入学が許可される前の1870年7月19日、プロイセン・フランス戦争が勃発する。戦時体制がとられ、大群衆がウンター・デン・リンデンの王宮前に集まる^{*36}。全市、全国が熱狂する。わけでもベルリン・ドームの礼拝にはルイーゼ王女をはじめ大学学長、学部長が出席する。進はバルデレーベン教授父子とともにテンペルホーフ演習場の野戦病院で負傷者の世話をした。その1年前、戦争が始まる前に、ここで山県有朋がプロイセン軍のパレードを見物している^{*37}。鷗外の頃にも野戦病院はあった。1887年7月27日にテンペルホーフ第二駐屯軍野戦病院を訪れたことを彼は日記に記している。それと知らずに進の足跡を追っていたのである。

さらに後の第二次世界大戦後、ここにテンペルホーフ空港が造られた。陸路が封鎖されていた期間、西ドイツからベルリンへ食料品の空輸を担った「空の架け橋」として歴史的に名高い。今日ではベルリン市民が週末にスポーツやピクニックを楽しむ

場になっている。

フォン・ランゲンベックがプロイセン・フランス戦争で息子を1人失ったことは全学生の心を同情の念で満たした。

進の大学生生活も終わりに近い1874年7月29日のフォッシッシェ・ツァイトウング（新聞）に、ベルリン大学の式典ホールに、1866年と1870年から71年の戦争で戦死した学生の名を刻んだ追悼の銘板が設置されることを報じた。1870年9月にフランスは降伏した。勝敗は決まったが、パリ開城をめぐる戦闘はなお1871年まで続く^{*38}。

この間、日本の国会では切腹廃止をめぐる論争が進んでいた。ビスマルクは死刑廃止を承認しない。

進の入学がようやく許可され、1870年10月8日、ベルリン大学の学生になる。この日学籍番号1389の進は萩原三圭（学籍番号1390）とともに医学部の冬学期（1870/71）に受講登録する。「両親の身分」欄には2人とも「医学博士」と記入する。出身地は「日本国、関東地方」である。姓名は Sousoumi Satoo と記してある。姓名の書き方には最後まで問題が残る。

1869/70年の冬学期については、10月2日から週に2回木曜日と土曜日の12時に大学の式典ホールで行われたことがわかっている。2012年2月17日に森鷗外生誕150年を祝ったホールである。「これから大学で勉学を始める者は、ドイツ国民は規則に定める成績表を、外国人は能力を証明するに足る正規の書類を提出するものとする」^{*39}。

進は正規の課程を修了し、続いて博士号を取るつもりである。「1838年1月29日付医学部規定」^{*40}には、正規の課程を終了し、さらに博士号を取得するために満たさねばならない事項が詳細に定めてあり、進の時代にも適用されていた。この規定は37ページにわたる長いもので、ここに全文は掲載できない。最も重要な項目だけを順を追って示そう。

第III章40節：4年間に聴講しなければならない必修の講義は、＜医学百科および方法論、一般および特殊解剖学、比較および病理解剖学、人間生理学、一般病理学、一般治療法、薬理学および薬理力学、特殊病理学、記号学、特殊治療法、食餌療法、医学史、外科学、眼科学、産科学、手術法および包帯法学説および実習、法医学、医学警察および動物病学説、人体解剖実習、医学、産科学、外科学および眼科学臨床実習^{*41}である。

75節：学部長は、新入生に必要な指示を与え、印刷された学習計画一覧を説明する特別の義務を負う。

77節：学部長は、学生の勉学意欲を半年ごとに評価する義務を負う。

93節：卒業生に学部から特別の証明書を交付することはない。卒業証書を入手したいものは大学判事に自分から申請しなくてはならない。

94節：学期中に学部は、受講登録している学生に、学部長を通じて在学証明書を交付する。ただしこれは学内でのみ有効であり、卒業証書として利用することはできない。—この規定が、進の卒業証書がないことを説明するかもしれない。卒業証書は自動的に得られなかった。博士号取得証書のほうがずっと価値がある。

第V章には博士号取得の条件が定めてある。

96節：学部は博士の学位授与を出願するものは少なくとも4年間の勉学を終了していなくてはならない。

97節：医学部で博士の学位取得を望む者は事前に人文系の予備試験（tentamen）^{*42}成績証明書を提出しなくてはならない。この試験は、受験者が論理学、心理学、動物学、植物学、鉱物学、わけても物理学と化学の、必須の知識を身に付けていることを確認することを目的とする。学部長がみずから受験者の学識を確認する。

98節：受験者は、96,97節に定める資格を有することを証明した後に、学部長より医学の予備試験（tentamen medicum）受験を許可される。その結果により本試験（tentamen rigorosum）受験が許可される。医学予備試験は筆記試験と口頭試問である。

99節：筆記試験は学長宅で学長により行われる。学長は受験者に、理論医学または臨床医学の分野から課題を出し、その場で、なんらの補助手段なしに答案を書かせる。学長は、受験者がその間に学長宅から外に出たり、書物などの補助手段を使ったりしないよう注意を払う。この答案^{*43}は口頭試問を補い、受験者の臨床能力と医学の主題を論じる能力を検証するものである。

101節：口頭と筆記による予備試験の成績次第で、学長が博士学位の本試験受験の可否を決める。受験者が十分な知識を示したなら、学長はただちに本試験の許可を伝える。

102節：受験資格ありと判定されたなら、受験者は学部の本試験許可を申請するが、申請書に履歴書を添付し、信仰する宗教を記載しなくてはならない。この文書を学長は学部構成員全員に届け、そのうえで、受験を許可するかどうか、書面による投票が行われる^{*44}。

103節：本試験許可が決定したなら学長は試験日を定め、学部構成員全員に出席を求める。受験生はこの教師たちの許に事前に出向いて自己紹介するよ

う申し渡される。

104節：文部省は毎年12月に、学長を含めて、医学の主要学科を代表する6名の正試験官を選任する。

105節：試験はラテン語あるいはドイツ語で行う。記録を取らねばならない。—残念ながら残っていない。

108節：試験に合格したなら、公開の論争が行われ、続いて学位授与式が執り行われる。会場は大学講堂である。

109節：博士の学位受験者は学部が承認した学位論文を自費で印刷させ、150部を大学の文書保管室に届けなくてはならない。論文は少なくとも32ページの長さを要する。受験者はその論文に関して、またはあらかじめ学長が承認した、論文を補強する、いくつかの主張に関して、論争を行う。

110節：学位論文を学部提出する際には、受験者は、その論文を自力で、他の助力を受けずに書いたことを明記しなくてはならない。

111節：論争と学位授与式への参加は黒板に掲示して募集する。

112節：学部長、受験者、論争相手は論争の際に黒衣を身につける。

113節：受験者は、学部長の司会を受け、低いほうの講壇から論争する。

114節：論争相手は少なくとも3名、論文の題目に応じて指名され、一番下の地位の者から発言する。

116節：論争終了後、学部長により、博士号授与式が行われる。

117節：博士号授与式は学位証書授与者が司式する。授与者は上の講壇の段に受験者を呼び出す。大学判事が保証（宣誓）の言葉を読み上げ、受験者は定められた言葉と握手をもって宣誓を保証する。ついで証書授与者が医学博士（Doktor Medicinae et Chirurgiae）の誕生を告知する。告知後、新博士は学位証書授与者から短い祝辞を受け、羊皮紙に印刷され、大きな学部印を捺された学位授与証書（公文書）を手渡される。新博士の謝辞をもって式典は終了する。

118節：この公文書は公開掲示され、何度も公文書綴りに綴じ込まれる。このために新博士は150部の写しを大学文書保管室に納めねばならない。

120節：博士号取得後は当大学の学生としての身分は消滅するので、除籍手続きをしなくてはならない。

127節：医学博士号取得証書交付料として学部長に金貨125ターラー、さらに大学図書館に5ターラーが納金される。

この規則書の末尾に「医学博士の保障」すなわち



図-3 ドイツ外科医協会記念ランゲンベック＝ヴィルヒョー館内にあるドイツの外科医達の油絵（1872年に設立されたドイツ外科医協会を記念して描かれたもの）
右から：ランゲンベック（立ち姿）とバルデレーベン（長い白鬚）

宣誓文がラテン語で印刷されている。

進はこの厳しい課程に挑戦する。主だった教師はバルデレーベン教授（外科学）、ランゲンベック教授（外科学）、ウィルヒョー教授（病理学）、ライヒェルト教授（解剖学）、デュ・ボア・レイモン教授（生理学）である^{*45}（図-3）。

政治家として歴史書も書いたウィルヒョーを除いて、これらの名を今日の普通のベルリン市民はほとんど知らない、だが、次回ベルリン訪問の折には通常の観光地以外にも足を運ばれることをお勧めしたい。ベルリン・クロイツベルクの旧聖マタイ墓地には、これらの傑出した医学者たちが眠っている（図-4）。ランゲンベック、バルデレーベン、デュ・ボア・レイモン（1831-1889）家の墓所のほかにも、グリム兄弟、作曲家のマックス・ブルーフ、ルドルフ・フォン・グナイス（進の同期生、青木周蔵の師）、森鷗外が『かのやうに』で名をあげている神学者のアドルフ・フォン・ハルナックの墓に詣でることもできる^{*46}。その他にもほかにはない独自性として、この墓地にはHIVによる死者のための埋葬区画と、「星の子どもたちの園」と呼ばれている、死産児、早産児のための区画がある。このように歴史は書き継がれていく。この1ヵ所に過去と今日が集まっている。

1888年1月の新聞が、井上哲次郎がベルリン大学で「神道」について最初の講演をしたことを伝えているが、その同じページに、1887年に亡くなった進の師ランゲンベックの追悼式典が1888年4月3日にフィルハーモニーで催され、追悼の辞に加えて、モー



図-4 ルドルフ・ヴィルヒョー（左）とアルブレヒト・グレーフェ（右）の墓

ツァルトのレクイエムがフィルハーモニー・オーケストラと音楽大学の合唱団により演奏されるという予告が載っている。

この偉大な外科医がベルリン市民からどれほど尊敬されていたかがわかる。ウィキペディアを見れば、ランゲンベックの数々の功績を世界中の言語で読むことができる。それゆえここでは、そこには記されていないが、進の人間としての成長に大きな影響を与えたに違いない大事な点をいくつか述べておこう。

当時の教授と学生は、今日の大規模な大学では想像できないくらい親密に接触していたのである。

弟子のカール・ルードヴィヒ・シュライヒはランゲンベックのことをこのように伝えている。「先生は、私の知る限り、もっとも騎士道精神に満ちた貴族だった。小柄で、白髪になっても豊かな巻き毛……高く張り出した額、尖った鷲鼻、頬髯はヴィルヘルム王型に整え、顎鬚はきれいに剃り、そして何よりも、手術の時には大きい金色の鼻眼鏡で保護する、王者のように輝く大きな青い目をもち、軽く身をゆする歩き方。先生のすべては、その品のよいリズムミカルな歩行のようだった。学生の中でもっとも目立たない者に対しても、並外れて心にしみるように、静かに親しく接してくれた。……講義はたいいていつも朝の挨拶のお辞儀で始まった」*47。

「先生の手術の速さは想像を絶する。先生が、できる限り早く手術を済ませるために様々な切断手術の手法を考案されたことはよく知られている。手術後に敗血症になる患者が多かった時代には、手術時間が長いほど感染の危険が増大するのだから、これはきわめて重要なことだった。とりわけ、まだクロロフォルムがなかった時代には、手術時間の短縮は、患者の苦痛の軽減を意味した。この人道的立場か

ら、ナポレオンの侍医だったレイ博士は、腰の関節からの片脚の切断を、止血、縫合、それから包帯を巻くまでのすべてを5分半で成し遂げた。先生も同様に、危険を避けるため、迅速な手術を心がけられた」*48。

ちなみに、永年ランゲンベックのアシスタントを務め、彼の右腕といわれたヴェルニックは、不祥事を起こし自殺しようとナイフで首を切り、ランゲンベックに命を救われた人物である。

「ランゲンベック先生はどんなことでもわれわれ弟子に大変親切に教えてくれた。私には麻酔術の初歩を自ら見せてくれた。麻酔には細心の注意を払い、『麻酔というのは、つねに人の喉を支えて5階の部屋からしばらくの間吊るすようなものだ』と言われたことがある。……すべての外科医がもっている奇妙な性癖が彼にもあって、歯を抜くのが好きだった」*49。

フォン・ランゲンベックは引退後ヴィスバーデンへ行き、そこで全財産を失ってしまった。何よりもまずは執刀医であり、切除術の名人であったこの人が、生涯の最後に、保守的な外科術によって生計を立てねばならなかった*50。

進に義父が、外科の器具をベルリンから送るよう頼んだことがある。これはランゲンベックが開発した器具のことであるに違いない*51。

森田美比は進の養子、達次郎の言葉を引用している：

佐藤進は、先祖譲りで器用だった。器用だったっていうのは、どういうところに出てるかっていうと、手術が早い。これで佐藤進が手術が早いっていうんで有名になった。医家に関する話があるっていうと、みんな珍しかった。実際に

やったことのないことを聞かされるからです。
みんなが出来ないっていうことが出来たし、それを身に覚えて帰って来ている。(後略) 昭和五十五年十一月七日

進が、上述のようなランゲンベックの態度を、単に並外れて器用な外科医として受け継いだだけではないことは明らかである。進は姿勢から身振りまで師にそっくりだったといわれる。学ぶことがまねることであるなら、進はこの教師からもっとも多く学んだのである。鷗外の上司、石黒忠恵が後に進を「日本のランゲンベック」と名づける^{*52}のもっともである。

フォン・ランゲンベックが学生を教え、患者の治療をした、Ziegelstraße 5-6の大学外科病院の建物は現存し、今はフンボルト大学工学部が使っている^{*53}。

ハインリヒ・アドルフ・バルデレーベン(1819-1895)の魅力は、豊富な文献の知識と鋭利な批判精神、出版熱にあった。彼はJ.リスターの傷口の殺菌治療法を簡素化し、修正した。進の在学時に医学部長で、帰国後の1876/77年にフンボルト大学学長を務めた。医学部予備試験の筆記試験は学部長の自宅で行うことができたので、バルデレーベン夫人が進に好感を抱いて、お茶を出すときにひそかに参考書を渡そうとしたのも不思議ではない^{*54}。夫人は規則の99節をそれほど厳密には考えず、母性愛から行動したのであろう。進が固辞したことも、個人的な親しい関係があったことを思わせる。

もう1人の教師ウィルヒョーは市民から「遺体切断者」というあだ名を奉られていた。彼にとって「仕事をしていない時間は……怠けて過ごした人生の一部」、「仕事以外の娯楽は退屈である」^{*55}。ウィルヒョーという名は「多才」の代名詞であり、視野の狭い専門家ではない。ありとあらゆる分野の仕事をし、いつも関連、横のつながりを捜している。「ウィルヒョーは、病理学者、公衆衛生研究者、人類学者、政治家という様々な面を同時にもっている。彼はある専門分野の知識を、隣接分野の研究から手に入れる。細胞病理学の創始者であり、「感染症」の概念を初めて明確にする。1865年に彼が織毛虫に関する学説をまとめてから、ドイツでは織毛虫が寄生している肉の販売が禁じられ、食肉の検査が法律で定められている。ハインリヒ・シュリーマンのトロイの発掘を支援し、成功を確信して自身も現地へ赴く。観光客はベルリンのペルガモン博物館でウィルヒョーの尽力なしには考えられない発掘物を見ることができる。彼の信条は、「臨床医学を政治的に立

法と直接関連づけること」である。進がベルリンに着くよりずっと前から進歩党の国会議員としてビスマルクの政策に反対を表明していた。ついにビスマルクはピストルによる決闘を申し込むに至る。ウィルヒョーのほうはそんな愚行にかかわる暇がない。あまりに忙しいので、試験の受験者を辻馬車に同乗させ、自宅から研究所へ向かう道中で急いで試験することさえある^{*56}。進もウィルヒョーの家に出入りしていたことがわかっている。ウィルヒョーの娘と一緒に舞踏会に行くよう誘われて困惑し、急いでダンスの授業を受けた。ダンスは当時の日本人留学生にとって特別の課題だった。社交のための不可欠の条件であり、鷗外も苦労した。

1901年10月13日、ルドルフ・ウィルヒョーの80歳の誕生日が「全医学界の祝典」のように祝われ、日本の主要な日刊新聞も1ページ全面をその記事で埋めた^{*57}ときの、ウィルヒョーに贈る金のメダルのための募金者名簿に進の名(Dr. Hakukushi Susumu Satô, Generalarzt/佐藤進博士、軍医将官。原文はスペルミスを含む)も載っている^{*58}。合わせて63人の日本人が募金に応じた。祝典の様子を告げる記事には、エルヴィン・ベルツを含めて286名の日本人からの祝辞が記録されている。ベルリンから帰国して30年近い月日が経ったが、進は旧師を忘れず、動向に注目してきた。80歳の誕生日の1年後、病気をしたことのないウィルヒョーが、路面電車から急いで飛び降りて転倒し、命を落とす。

プロイセン・フランス戦争(普仏戦争)が終結し、ドイツ帝国が建設される。ヴィルヘルム1世が皇帝になり、オットー・フォン・ビスマルクは宰相、ベルリンは帝国首都になる。ベルリンはすでに工業都市に成長していた。1871年の人口は826,341人、衛生状態は嘆かわしいばかりだった。ベルリンは悪臭に満ちていた。ジェイムズ・ホープブレイト(1825-1902)^{*59}が1868年に工事責任者に任命され、1971年に下水道網の構想を提出する。その計画案のもっとも強力な支持者の1人がルドルフ・ウィルヒョーである。彼は啓蒙家として医学的見地から見た近代的排水設備の必要性を熱弁する。当時の新聞には彼の名が政治家の名より頻繁に登場する。ウィルヒョーの名は医学者としても政治家としても同じように広く知られている。ジェイムズの兄のアーサーが1872年にベルリン市長に当選し、1873年に下水道建設工事が始まる。進は医学の勉強をしながら、こうしたことをすべて直接見聞きしている。

後に東大でドイツの方式に倣う医学教育が始まるときにも、進はかかわる。1870年6月のドイツの新聞が、ドイツ人医学者が初めて日本に派遣されるこ

とになった、と伝えている。プロイセン政府はレオポルト・ミュラー軍医少佐（1824-1893）とテオドル・ホフマン海軍軍医（1837-1894）を送り出すことに決めていた^{*60}。この2人が選ばれたのは、日本在住のプラントの提案と、ベルリンでは進の師フォン・ランゲンベック教授の仲介による。プロイセン・フランス戦争（普仏戦争）の勃発により出発は1年以上延期された。1871年8月23日に2人は横浜に到着した。

1871年4月9日の岡本道庵宛の手紙で進はミュラーとホフマンの来日を知らせ、大変温かい言葉で推薦している。2人ともよく知っている（僕ノ知人）。まじめな良い性格である（至テ実直ノ人物）。知識も豊富である。だが教師をもっと招聘するべきであろう^{*61}。

その他に、北白川宮がベルリンで勉学中だが、一般人のように行動し、ほかの学生達と連れ立って食事に行ったりする、とも書いている。進は北白川宮から良い印象を受けている。「実ニ一諸生同様ニテ御留学中ハ僕杯と同居同食、宮様之風少シモ無之候」。

1872年1月16日のフォッシッシェ・ツァイトウンゲ（新聞）に内務省で開催される「日本展」（Japanesische Ausstellung）の記事が載っている。進の時代、ドイツの新聞は、中国人をChinesenと書くのに合わせて、日本人をJapanesen（現在はJapaner）と書いた。後に鷗外は、明確にするために、一貫してNipponと書く。日本で暮らすドイツ人が様々な陳列品を送ってきていた。その売上金を傷病兵のために使うことになっていた。ドイツで勉学中の日本人も多数、展示を見にきたという。1872年1月21日の新聞によれば、その直後の1月19日に最初の日本公使、鯨島尚信^{*62}がベルリンのHotel de Romeに宿泊した。年末には80人といわれる日本人学生が天皇家の子弟1人とともにクリスマスパーティに集まり、故国のグレゴリオ暦採用と、それに伴う新時代の到来を祝うことになる^{*63}。

1872年の春にはバルデレーベン、ランゲンベック、ビルロートなどによって「ドイツ外科協会」が設立され、組織の成立とともにドイツの外科医たちも新しい時代を迎えた。

進の成績証明書は残っていないが、本試験のための文書の中に4という1枚の書類があり、日本のJeddo^{*64}出身のSusumo Satooがベルリンで8学期修学し、1872年7月27日に人文系予備試験を「可」（genuegend）の成績で合格した^{*65}ことが確認される。2年後の医学予備試験ではずっと良い成績を収める。筆記試験も口頭試問も「優」（gut）の評点で

ある。義父、佐藤尚中宛の1874年7月25日の手紙で、ベルリンでの最初の試験はあまりうまくいかなかった、と自認している。これが彼の功名心に火を点けたのだろう。その後は良い成績が続く。失敗は成功のもとである。

進はボギスラウス・ライヒェルトの注意を引いてもいた。この教師が出す問いにいつも正しく答えたからである。進は正規のカリキュラムに入っていたライヒェルトの死体解剖に感激した。日本ではたかだか年に一度しか機会がないのに、ベルリンでは14体ほどが利用できて、1つの死体で2人か3人の学生が同時に解剖をしていた。カール・ボギスラウス・ライヒェルト（1811-1883）はポーランド生まれで1858年から1883年に亡くなるまで解剖学教授のポストにあり、近代発生学の祖といわれる。彼は脳の解剖の研究と頭蓋骨の発生の究明に熱心に取り組んでいた^{*66}。ライヒェルトは研究のために状態の良い日本人の頭蓋骨を使うことを切望していた。進はこの願いを1872年2月24日に日本の父に取り次いだ。森田美比著『外科医佐藤進 一日本近代の歩みメスで支える』にこれに関する記述があるのでここに記す。

“…政府は、超えて明治四年十月右大臣岩倉具視を全権大使とする使節一行を欧米諸国に派遣し、…翌年九月に帰国するのであるが、副使節は参議木戸孝允、大蔵卿大久保利通、工部大輔伊藤博文、外務少輔山口尚芳というそうそうたるメンバーであった。

使節一行はベルリンに着くと、ウンテルデンリンデン街のホテル・ドロームに宿をとり、…着いたのは、明治五年夏のころと推定される。…進は、大久保に会うようにとの父尚中の書状に従って、その大久保に会いに行くのである。ところが、父から託されたという玉手箱からどくろが飛出すという「ビックリ箱」であった。そのいきさつを進は、「大久保公について」という短文に書いているので、主な部分を引用しよう。

ひととおりのあいさつがすむと、公は、父よりの依託なりとて、一個の箱を老生の前に差出された。桐材でもって丈夫に作り上げ、黄青の緒で丁重に結ばれてある点から考えると、どう見ても、銀製もしくは陶器製の花瓶としか思われぬ。父からは、ただ品物を御依頼申したとのみで、その品質・品名については、何も言っていない。公は、別になんともおっしゃらなかったが、その顔つきから考えると、やっぱり、老生同様に、先生へでも贈るため、国産の花び

んか何かと推測され、せつかく遠国まで持参して遣わした、その品物の無事かどうかを御覽になりたい様子に見受けたから、ちょっとお断り致して、その箱を開いてみたところ、なんぞ凶らん、それが一個のどくろであった。これには、さすが物に動ぜぬ沈毅の公も心中いささか一驚を喫されたではないかと思う面色であった^{*67}。

二人は、どくろを間に置いて対座していた。二人には、それぞれの思いがあった。……

この桐箱入りどくろには経過があった。進は、解剖学のライヘルト教授から、解剖局や博物館には世界の各人種の頭骨の標本は備え付けられているが、残念ながら日本人のものはないので、研究のために本国から取寄せることをあつ旋してもらえまいかと頼まれていたのである。そのことを進は、明治五年二月二十四日(日本では一月十六日)の書簡で、父尚中に、研究のため、大学の「供物」として後世に残すため「可相成は恰好宜シキ頭骨御撰ミ御遣シ可被下様奉願上候」と依頼していた(前掲『順天堂史』, 331ページ)。それが実現したのである。その事の次第を大久保に語ったことはいうまでもない。こうして頭骨は、ベルリン大学の標本室に納められた^{*68}。

夏に大久保利通が、日本人の頭蓋骨の入った木箱を携えてドイツにきた。大久保利通(1830-1878)は1871-1873年に欧米に派遣された岩倉使節団(図-5)の副使節、後の内務大臣である。だがこの使節団がベルリンに着いたのは、夏ではなく、翌年1873年の3月だった。彼らは1872年の夏をイギリスで過ごしていた。大久保が1人で1年前に来ていたということはあるそうにない。岩倉使節団の書類のなかに、



図-5 岩倉使節団がベルリンを訪問した1873年当時のベルリン在住日本人留学生の写真(進がどこにいるのかは不明)

(写真:日独いしずえの歴史—長井長義,『長井長義ベルリン展』カタログ,ベルリン日独センター,2000:p67より)

頭蓋骨引渡しの記述はない^{*69}。他方また、1871年末に日本を出発した使節団の一員が、1872年に贈り物を持って出て、1873年にそれを贈呈するということがありえようか。大久保が出発を遅らしたこともありえない。1872年1月23日にサンフランシスコで撮影した写真に大久保は写っている。不明な点があるが、頭蓋骨がベルリンで贈呈されたことは事実である。

順天堂の皆様初めてお目にかかった日から、この歴史的に興味深いいわれのある頭蓋骨は今もベルリンにあるのだろうか、という疑問に筆者は動かされてきた。まずシャリテの解剖学コレクションの責任者であるヴィンケルマン氏にコンタクトを取ったが、頭蓋骨の実物を見ることはできなかった。その時点で、コレクションの収蔵品はすべて梱包されていたからである。ここから運び出して、ベルリン人類学・民族学・原史学協会に譲渡されるのだという。だが氏は、コレクションのカタログを調べて、「問題の品を、それであると確認する」ために必要な、登録表示「解剖学コレクションの『日本人の頭蓋骨』以前にいわゆる『人種別頭蓋骨コレクション』Nr. 781, 旧ナンバー『NC1173/AN25041』」を知らせてくださった。「以前お伝えした『Yeddoの日本人』という表示は、以下に述べる1880/81年のプレジケの刊行物に見られます(そこではNr.167としてあります)。この数字および25041という数字は、この頭蓋骨がライヒェルトの時代に解剖学コレクションに加えられたことを示します^{*70}。いわゆるプレジケ・カタログ^{*71}にはこの頭蓋骨に関して、「Yeddoの日本人の、保存状態の良い白色の、かなり重い頭蓋骨……」と始まる、詳細な記述がある。

この頭蓋骨を、少なくともカタログの番号だけは発見して、私は大変嬉しかった。頭蓋骨そのものに、あるいはそれを入れた箱に、日本語でその由来を書いた表示が見つかる希望が生まれた。そのような表示が残されていないことは、その後わかったが、それはそれとして、頭蓋骨、広く遺骨を検分することはドイツでは微妙な問題になっている。ちょうど私が調査を始めたころ、2011年11月30日に、ナミビアとの外交上の軋轢がドイツの新聞のニュースになった。植民地時代にナミビアのナマ族とヘレロ族が今でも伝説として残る反乱を起こし、ドイツが多数の死者を出して鎮圧したのだが、彼らの頭蓋骨20個を、故郷の地に丁重に葬るために、ナミビアが返還を要求してきた。それより前の2008年にシャリテは、進んで提供されたのではないオーストラリア先住民の頭蓋骨18個を返還する条約をオーストラリアとの間で結んでいた。「江戸の日本人」の場合

とは違い、これらは戦利品としてドイツに運ばれてきたので、贈り物ではない。それ以来、「頭蓋骨」という語は、うっかり口にすることができない。フラッシュを浴びて外交問題になりかねない。コレクションの頭蓋骨を学問上の目的で検分するにしても、どのように、どういう条件で、という厳しい規則がある。

コレクションが新しい保管場所に着き、整理されてから、私は新しい担当者で、人類学・民族学・原史学協会理事のホルスト・ユンカー氏に連絡した。協会は、ベルリン国立博物館内、先史および古代史博物館の中にある。メールと手紙のやり取りをかなり長く続けた後に、『順天堂醫事雑誌』に掲載されるこの原稿のために頭蓋骨の写真を使わせてもらえることになった。進が師のライヒェルトに、たぶん1873年に贈呈した、あの頭蓋骨である(図-6)。

ユンカー氏はこう書いてこられた。「この頭蓋骨は日本起源と書かれています。以前はベルリン、シャリテの解剖学研究所の、いわゆる人種別頭蓋骨コレクションの所蔵物でした。この頭蓋骨はシャリテから、今日の解剖学センターのコレクション中の、ほかの多数の人類学ないし解剖学の研究対象とともに、2011年に、ベルリン国立博物館内、先史および古代史博物館に譲渡され、今後ここに収蔵されます。この頭蓋骨の入手時期が、岩倉使節団のベルリン訪問とおよそ一致することは、確実であるといえましょう。これが1873年にライヒェルトに贈られた、日本からの頭蓋骨である可能性は、解剖学研究所のコレクション中にはこれ以外に日本の頭蓋骨は1つしかなく、こちらは20世紀初頭にコレクションに加えられたものであることから、きわめて大きいと考えられます」*72。

医学の研究対象は具体化された歴史である。だがその背後に、どのような歴史が潜んでいるだろうか。私が日本人の頭蓋骨の写真をもらう交渉をしていた間に、シャリテの医学史博物館が2012/13年の冬学期から2013年の夏学期に続く、「医学研究対象史」という連続公開講演を始めたことは興味深い符合である。しかも何という偶然か、2013年1月15日にシュテーカー博士とケール＝アプト博士(2人ともベルリン)が「頭蓋骨、ベルリン人類学コレクションでの起源研究」という題で話したのである。ただし、日独医学者の実り豊かな関係の象徴でもある、この日本人の頭蓋骨の歴史は話題にならなかった。私はこの原稿を、日本からの論評を期待して送る。ともあれ頭蓋骨というテーマは目下のベルリンで非常に刺激的である。

もう一度、岩倉使節団*73に戻ろう。この政府派遣団の到来はベルリン滞在中の進にとって重大な体験だったに違いない。ドイツ人の教授たちさえ敬意を表して、学生達が故国政府の代表をレールター駅、現在のベルリン中央駅に出迎えることを許可した*74。

久米邦武の航海日誌*75が記している、その後の出来事にも進は参加したかもしれない。進はベルリンにきた最初の年にもうベルリンの劇場をすっかり覚えてしまったのだが、3月11日に使節団が帝国劇場でリヒャルト・ワーグナーの「ローエングリン」を鑑賞した時、同席しただろうか。障害になったかもしれない唯一の理由は、その晩のチケットが特別高かったことである。3月12日の晩、ベルリン大学の教授と学生は、病氣療養からベルリンに戻った皇太子フリードリヒ・ヴィルヘルム(1831-1888)を歓



図-6 頭蓋骨 RSK 781/NC 1173

撮影：ホルスト・ユンカー

著作権保持者：ベルリン国立博物館プロイセン文化基金付属 先史博物館(略記：SMB-SPK, MVF)

迎し、快癒を祝った。教授たちが馬と馬車で先に立ち、学生たちは太鼓を鳴らし松明をかかげて、ブランデンブルク門から皇太子の宮殿まで行進した。

3月14日、使節団はシャリテとアウグスタ病院を訪問した。医学を学んだ日本人のうち、だれが同行したのだろうか。3月23日の大学視察はどうだろうか。3月16日には北白川宮能久親王の誕生パーティがGroßbeerenstraße 5の宮の住いで催され、和食が供された。使節団員と数人の学生が参加した。3月19日、岩倉使節はキリスト教プロテスタント連合の代表を迎え、日本におけるキリスト教禁止の廃止を願う請願書を受け取った。1871年春、鷗外の生地、津和野で4人が処刑された。これが最後の殉教になった。浦上のキリスト教徒迫害には使節団の1人、木戸孝允が重要な役割を果たしていた。3月28日に大久保利通副使節はフランクフルト・アム・マイン経由で帰国の途についた。進の願った頭蓋骨をもたらした人物を、だれが見送ったのだろうか。

1873年に岩倉使節団がドイツを歴訪したとき、通訳を務めたのは青木である。学友であり、かつての共同生活者でもある青木を通して、進は、大久保に会い頭蓋骨を受け取る用件にとどまらず、岩倉使節団と深くかかわったに違いない。

プロイセン・フランス戦争勝利後、青木はベルリンに学ぶ日本人学生の世話役に任じられていた。1873年から代理大使、1874年秋から1875年には全権大使になった。1884年、鷗外がベルリン到着後、最初に訪問して助言を受けた相手の1人も青木である^{*76}。

もう1人の、かつての共同生活者が帰国することになった。5月中旬の新聞に、日本に派遣される3人目の医学者、ベルリンの解剖学者、デーニツ教授の盛大な送別会の記事が載った。教授は萩原三圭の師であり、萩原は助手として日本に同行する。送別会には40名の日本人学生が列席し、「数日前に人文系予備試験(examen physicum)に抜群の成績で合格した医学者候補(Cand. Med.)萩原三圭」が見事なドイツ語で謝辞を述べた、と書かれている。一進は当然、留学当初からの学友に、それにふさわしく別れを告げた、と筆者は思う。

1873年9月2日、今日なおベルリンのシンボルの一つである、戦勝記念塔の建設工事が完了した。ブランデンブルク門を背に、皇帝ヴィルヘルム1世とオットー・フォン・ビスマルクが落成を祝い、大規模な軍隊のパレードが行われた。進も見物したか、それとも彼には別の心配があったか。1873年秋の頃、彼は強制帰国命令を受けたに違いない。明治政

府は留学費用をこれ以上支給できない^{*77}。勉学完了の直前に諦めるのか。進は、長井長義、池田謙齊とともに、自費でドイツにとどまり、ベルリン大学での正規の医学教育を、規定の試験に合格して修了することに決めた^{*78}。

博士号取得前、最後の2ヵ月も、それ以前と変わらず、世間は騒がしかった。宰相ビスマルクの暗殺計画が全国を揺るがせた^{*79}。進の師、ウィルヒョーは、日本に行ったことはないが、アジアへの関心が高く、前年の1872年3月に東京に設立されたドイツ東洋文化研究協会(OAG)への支援募金を広く呼びかけた。この呼びかけ文にはミュラー博士、フォン・ブランド博士も署名した。協会はすでに120名を超す会員を擁し、多数の蔵書を集めていた。「それゆえ、志ある方々に、日本にあるわれわれの同国人を援助していただくよう……私個人のみならずベルリン人類学協会の名をもって、せつをお願いいたします」と、ウィルヒョーはベルリン市民に訴えた。このような事件はすべて、ドイツ人教師とその日本人の弟子達の間で熱く論じられたと考えられる。ミュラー教授、ベルツ教授に加え、青木周蔵、桂太郎も協会員だった。進が入会をどの程度考えたかは、確認できなかった。

ルドルフ・ウィルヒョーは実際、もっとも頻繁にメディアに登場する医学者だった。彼がグルーネヴァルトで野生動物に炭疽の診断を下したことも、1874年7月2日に科学アカデミー新会員として就任演説をしたことも、新聞から知れるのである。

進の本試験の2日前に、フォス新聞の日本特派員が、5月に反乱軍が鎮圧された(佐賀の乱)ことを報じた。江藤新平・元司法卿が同士11名とともに四国で逮捕され、佐賀で斬首刑に処せられた。江藤が犯罪人の写真を諸所に掲示する方式を導入したことが特筆された。これが、このたびは彼自身の逮捕につながったのである^{*80}。故国の政治的混乱を読んだ進の胸中はどうだったのだろうか。

それとも彼は最後の2つの重大な試験のための勉強にひたすら打ち込んでいただろうか。第一は本試験(examen rigorosum)、博士の学位を得るための前提条件としての厳しい口頭試問である。一今日の本試験、医師になるための試験とほぼ同じである。ドイツ語では「ドクター」という概念が「医師」にも「医学博士」にも使われるので、進が手紙に書いている「ドクター試験」の概念には少し混乱がみえる。

1874年7月25日の進から佐藤尚中宛の手紙を読むと、筆記試験(tentamen medicum)は7月17日に9時から13時まで(バルデレーベン学部長の自宅で)行われたことがわかる。学部長は試験問題を配るだ

けで、解答はドイツ語で書かなくてはならない。

この試験が終わると、バルデレーベン学部長は規則に従って、同日、7月17日に、医学部の「ランゲンベック、フィルショウ、フレイリヒス、デュ・ボア・レイモン、リープライヒ教授を7月24日金曜日午後5時に、医学博士号取得試験受験生ベヒ（あるいはベックか、判読困難）、グレーニンゲン、クーノウ、江戸から来た佐藤（Satoo aus Jeddo）の口頭試問のために」召集する。口頭試問は17時から23時まで、6時間続いたと記録にある。6人の教授が受験者に次々に問題を出す。試験科目は解体学、組織学、人身理学、病理学、内科、外科、産科、薬物学の8科目だった。

当然、受験には正装（礼服）で臨まなくてはならない。手紙によれば成績が「特優」（sehr gut）であれば、受験料が払い戻される。進とドイツ人一人がその評価を受けた。進はこうして医師になったが、少々ホームシック気味である。日本人学生が、たとえば伊東方成のように、次々に帰国するのを寂しがっている。

1874年7月28日の新聞は、1年前に岩倉使節団の団長としてベルリンに滞在していた岩倉具視が官職を追われたこと、使節団の一員であった木戸孝允がおそらく殺害されたことを報じた^{*81}。このような誤報はきっと試験期間中の進を動揺させたことであろう。これは誤報で、実際に木戸が死去したのは1877年のことであったが、この記事が間違っていたことを進が知ったのは、おそらく帰国のあとであったと思われる。

医学博士号取得のためには、まだ学位論文の執筆と論争という最後の大きい試験が控えている。テーマは「小児の下痢について」である。今日の視点からすれば「わずか」30ページの論文は非の打ち所のないドイツ語で書かれ、「わが父に感謝と愛をこめて」捧げられている。彼はこれを、Friedrichstraße 103の印刷所で150部刷らせた。まず、「病気」という概念を、嘔吐を伴う下痢に関連づけて、機能障害は症状か病気を検討する。次いで、この問題に関する様々な学説を取り上げ解説する。のちに卓越した外科医になる人が下痢について書くのは、不思議かもしれない。小児科学からテーマが取られた詳しい事情は断定できない（小児科学は長い間、外科学の一部とみなされてきた）。だが、当時のベルリンの新聞に丹念に目を通すなら、子どもの死亡率が非常に高かったこと、そして子どもの場合、もっとも多い死因の一つが下痢だったことが確認できる。進のテーマはその時代に即したものだ。

1870年7月17日の新聞によれば、同8日から17日

まで、つまり10日間のベルリン市民の死因は次の通りである。死産23、誕生後の衰弱28、老衰11、自殺4、各種事故6、産褥熱2、赤痢3、天然痘2、しょう紅熱4、はしか6、百日咳3、胃の神経熱とチフス6、紫斑病1、カタル熱とインフルエンザ3、リウマチ1、子どもの下痢と嘔吐を伴う下痢110、脳炎18、ジフテリア7、気管支炎13、肋膜炎と肺炎17、下腹部の炎症2、喉と肺の消耗性疾患64、硬直性痙攣4、子どもの急痙38、卒中15、消耗性疾患46。

新聞に載る数字を何年も追ってみる必要があるだろう。1873年になると、3月27日までの1週間の、下痢による子どもの死者数を新聞は14と記している。1週間に14人というのでも、やはり大きい数字であり、医学者が取り組む十分な理由になる。

進の論文試験の直前、フリードリヒ・ヴィルヘルム大学は「8月3日に創立者の誕生日の祝典と、夏学期の終業式を伝統に則って」行った。教授の入場後、ヴァイヤシュトラース学長が「日陰でも22℃の暑さの中で、金の飾りのついたひだのたっぷりあるピロードのコート姿で……式辞を述べるために演壇に」^{*82}登った。進は試験準備に夢中でこの行事を欠席したか。そういうことはあるまい。1864年から1890年までベルリン大学で教え、1870年から71年は人文学部長、1873年から74年には学長を務めた数学者カール・ヴァイヤシュトラース（1815-1897）の名は、彼の博士号授与証書に記されるのである。

1874年8月に進は父尚中に、博士試験に合格したことを知らせる。非常に嬉しい。いくつかの新聞が彼のことを書いた。その記事を同封する。来月中ごろにウィーンに引越したい。ベルリンの大使館宛に送金してくれるよう、頼んでいる。

日本から来て、ドイツで医学部の全課程を修業し、博士試験に合格した、初めての日本人医学博士についての記事は、ドイツ、オランダ、日本の多数の新

— Am vergangenen Montag promovirte an hiesiger Universität Herr Susum Sato, stud. med. aus Japan. Nach der „Zit.“ verteidigte derselbe seine Dissertation: „Ueber Durchfälle bei Kindern“ und seine 4 Theilen in ziemlich gewandtem Deutsch, dessen Kenntniß er sich durch sein Studium während 9 Semester angeeignet hat, und stellte auch wie üblich in lateinischer Sprache das Ansuchen an den Decan Prof. Dr. Bardeleben, ihm den Ehrentitel des medicinischen Doctorgrades zu ertheilen. Der Decan erwiderte hierauf: Longum iter fecisti, factus es nostralis, primus ad gradum doctoris promotus; sed antea opus est, ut tuo modo obstringaris temet ipsam jure jurando doctorali. („Rang war kein Weg, Du bist einer der Unstrigen geworden, Du hast zuerst den Rang eines Doctors erlangt; doch zuvor ist es noch nöthig, daß Du Dich auf Deine Weise durch den Doktoreid verpflichtest.“) Sato leistete auch den üblichen Schwur, jedoch unter Weglassung der Schlüsselworte, in welchen zur Bekräftigung auch das sanctum evangelium citirt wird. Der junge Doctor, der sein Examen magna cum laude bestanden hat, ist der Sohn des Leib- arztes des Nicabo, 26 Jahre alt und bereits in Japan ärztlich während eines Krieges thätig gewesen. Er geht von hier über Wien, wo er kurze Zeit noch studiren will, durch Italien, Frankreich und England nach seiner Heimath.

図-7 1874年8月14日付けのフォシシェ新聞の記事より進の博士試験についての記事の部分

間に再録された。今日の報道と同じく、その文面にさしたる相違はないだろう。それにもかかわらず、その記事は長い間1つも見つからなかった。国立図書館の雑誌保管室で何ヶ月も探して、ようやく私は1つ見つけることができた(図-7)。

国王より特権を与えられた国事と学術問題専門ベルリン新聞(フォッシッシェ・ツァイトUNG)1874年8月14日第二付録^{*83}、「地方版」3ページ(「トリビューン」紙の報道の再録だが、後者は国立図書館雑誌保管室に残っていない)。

「去る月曜日(1874年8月10日 一筆者註)
 当地の大学で日本から留学中の医学生、佐藤 Susum(u脱落 一筆者註)氏が博士号を授与された。「トリビューン」紙の伝えるところでは、同人は達者なドイツ語による「小児の嘔吐を伴う下痢について」という学位論文と4項の主張で試験に合格した。この語学の知識は9学期の学業中に身に付けたものである。さらに氏は、通例どおりラテン語で、学部長、医学博士、バルデレーベン教授に医学博士の学位授与を申請した。学部長はこれにラテン語をもって応じた。Longum iter fecisti, factus es nostralis, primus ad gradum doctoria promotus; sed antea opus est, ut tuo modo obstringaris temet ipsum jure jurando doctorali. (「道は長かった。君は我らの一員になった。君はまず医師の地位を獲得した。だがその前になお、君は医師の誓いによって、君のやり方で、自ら義務を負う必要がある。’)佐藤は定められた誓いの言葉を述べたが、保証のために聖書が引用されている。末尾を省略した。優れた成績で試験に合格した新博士は、天皇の侍医の子息で、26歳、留学以前に日本ですでに戦時に医療を行っていた。氏は、当地を発ってウィーンに赴き、そこでなお少時研鑽を積み、その後イタリア、フランス、イギリスを経由して故郷に帰る」。

プロイセンの宗教に対する自由な態度に、岩倉使節団がすでに注目していた。ユダヤ人の博士号取得者も同様に、「聖書」の言葉を免じられた。ユダヤ人には、それに代わる、定められた文言があったが、進の場合はこの箇所が完全に省略されたい。

こうして進は博士号を獲得し、「特優」の評点で試験に合格した。学術語であるラテン語で発行された博士号授与証書には、SVSVMI SATOと記されている。—Iは謝りだが、Vはラテン語ではUと同様に読まれる。

1874年8月10日、博士号取得の日付で、入学手続

き番号1389の「Susumi Satoo」の除籍が記録に残っている。目標は成し遂げた。多数の書物を日本へ送る費用は残っていない。送料は受取人払いである。発送人が故郷に持ち帰る知識、成果、名誉に比べれば、それが何ほどのことであろう。

彼はもう少し他の国々を見てまわって、アジアを経て日本に帰るだろう。アメリカも通ってきたのだから、1875年8月6日に再び日本の地を踏んだ時、博士の称号が鞆に入っていただけではない。世界周遊も果たしたのである。

(原文はドイツ語、翻訳：野村美紀子)

脚 注

- *1 森林太郎(鷗外)、1862-1922。本来であれば1人の医師として森林太郎と表記するべきであろうが、ここではあえてよく知られている彼のペンネーム「鷗外」を用いる。鷗外という名前で、彼は歴史に残ったからである。
- *2 赤松登志子、1871-1900。
- *3 鷗外の父 森静男略伝(21)、富崎逸夫著、「ほうふ日報」紙 平成6年3月1日から9月10日掲載の記事。
- *4 Brückenbauer, 203ページ。
- *5 森鷗外『独逸日記』1886年2月20日。
- *6 今日、石原あえか氏『ドクトルたちの奮闘記』のような本を執筆するにあたり、フンボルト大学の資料室で、名の知れた日本人の学籍書類等をすぐに見つけられるようになったのは、数世代にわたる日本学者および学生がこの類の資料を検索し、使用しており、常にこの資料に触れてきたからである。この資料作成にはルドルフ・ハルトマンが多大な功績をもたらした。名前を好きなように綴っていた明治時代の人物を照合させる作業は、決して楽なものではなかったはずである。
- *7 Hartmann, 2005年7ページ。Satô Susumu, 165ページ。
- *8 Hartmann, Lexikonを参照。
 国立図書館プロイセン文化財団のHPにおけるリンクは以下の通り。http://crossasia.org/digital/japan-studierende/ なぜ1868-1914年に限定されているかというと、1868年には最初の日本人留学生がドイツに学籍登録し、1914年には(第一次世界大戦の)宣戦布告とともに、日本人留学生らが帰国したからである。1868年冬学期に、ハイデルベルク大学にて勉強を始めた最初の日本人は小松(馬島) 済治(1848-1893)であった。同年には青木周蔵(1844-1914)と萩原三圭(1840-1894)も渡独しているが、この2人がベルリン大学に学籍登録したのは2年後の1870年である。それ以前にも、大名の命を受けた赤星研造(1844-1904)が到着しているが、まずはドイツ語の勉強をしなければならなかったため、ハイデルベルク大学に籍を置いたのは1870年のことである。
- *9 医学者尾崎平八郎(1847-25.1.1874)および軍の命令で渡独した益満行靖(?-5.8.1878.)の2名。パンツァーによれば、岩倉使節団の滞在中、1973年3月19日午前11時に、日本人のサーカス曲芸師であるトラキチという男がベルリンにて埋葬された。Kumeを参照、504ページ。
- *10 伊東方成、天保5年12月15日～明治31年5月2日

- (1834-1898) 明治天皇の御典医。開設間もない長崎養生所で佐藤尚中・長与専斎らとオランダ軍医ボンベから西洋医学を学ぶ。文久2年(1862)幕府の海外留学生として林研海、西周(鷗外はその従甥にあたる)および鷗外の結婚により彼の義理の父となる赤松則良とともにオランダに留学。明治3年(1870)ドイツに派遣され医学を学び明治7年(1874)に帰朝。明治10年(1877)一等待医。明治20年3度ヨーロッパに派遣された。
- * 11 Altgraf Salm-Reifferscheidを参照, 91ページ。
 - * 12 両者とも没年は1922年である。
 - * 13 『舞姫』に登場する相沢謙吉のモデル。
 - * 14 小堀桂一郎を参照, 53ページから71ページ。
 - * 15 酒井シヅ氏のご厚意によりお手紙をご提供いただいた。
 - * 16 Stegerを参照, 59ページ。
 - * 17 福澤諭吉『福翁自伝』を参照。
「……私の身の恥を云はねばならぬ……私は^{うまれつき}天稟気の弱い性質で殺生が嫌ひ人の血を見ることが大嫌ひ……所が露西亞に滞留中 或る病院に外科手術があるから見物せよとの案内に……其中に私は変な心持になって何だか気が遠くなった……独逸の伯林の眼病院でも^{やぶにらみ}敵目の手術として子供の目に刀を刺す処を半分ばかり見て 私は急いで其場を逃出して其時には無事に済んだことがある……」152,153ページ。
 - * 18 Rudolf Virchow, 1821-1902.
 - * 19 Hermann Ludwig Ferdinand von Helmholtz, 1821-1894. 生理学者および物理学者。多方面で活躍する自然科学者として、物理の総理大臣と呼ばれていた。1850年に眼底検査のための検眼鏡を發明。1851年には角膜のラジアン等の測定で加えられる眼科学の器械ケラトメータ (Ophthalmometer) を、1857年にはTelestereoskopを發明した。
 - * 20 Albrecht von Graefe, 1828-1870. 彼の父 Carl Ferdinand Graefeは大学による初めての外科クリニックをベルリンのフリードリヒ通り101番に建てた。このクリニックは後にツィーゲル通りに移り、ここで進は学んだ。
 - * 21 Behrenstraße 48. Feylを参照, 99ページ。
 - * 22 1910年に「ベルリン医学協会」がこの土地を購入した。1913年には同協会と「ドイツ外科協会」が合併し、共同でルーゼン通り58/59番の「ランゲンベック・ウィルヒョー館」を所有している。
 - * 23 2010年10月13日, ドイツ Berlinで開かれた第2回 Word Health Summitの最終日である2010年10月13日, 順天堂大学とシャリテ大学病院が主催する「Joint German-Japanese Symposium (Juntendo University & Charité-Universitätsmedizin Berlin)」が開催された。ドイツ側ではErich Knop教授が、この記事の著者と内山安男教授を講演会に招いてくださり、これが佐藤進とベルリンについての本格的に調べるきっかけとなった。
 - * 24 1869年9月15日の手紙。1870年4月18日に妻に宛てた2番目の手紙の末尾で、進はヨーロッパのカレンダーによれば、5月18日前後に相当すると書いている。すなわち、進が表記する時間は、1872年までは、実際には1ヵ月後の日付に相当する。
 - * 25 グレゴリオ暦が使われはじめたのは、1873年から。
 - * 26 Geheimer Medizinal-Rath Prof. Dr. Emil Heinrich du Bois Reymond (1818-1869).
 - * 27 石原を参照, 75ページ。
 - * 28 “III”は、街路に面した建物の3階を意味し、“9-3,5-7”はマース氏の面会時間を意味する。すなわち、9時から13時および17時から19時。
 - * 29 ハルトマンの文献によれば、以下の住所が登録されていた。萩原 : Mauerstraße 26, 青木 : Mittelstraße 52, 佐藤 : Französische Str. 58およびMauerstraße 22.
 - * 30 「ベルリン最古の学生街」、いわゆる北のフリードリヒ街は、南はライプツィガー通りから、北はシュプレー川まで、東はシュプレー運河から、西はティアガルテンの近くまでを指した。Zschockeを参照, 4ページ。
 - * 31 長井長義は1871年5月31日にベルリンに到着した。
 - * 32 Luisenstraßeには、明治時代合わせて56人の日本人が住んだ。
 - * 33 森田を参照。
 - * 34 1870年2月2日付, フォッシッシェ・ツァイトウング(新聞)4ページ。
 - * 35 1870年2月1日付, フォッシッシェ・ツァイトウング(新聞)5ページ付録1。
 - * 36 7月17日付, フォッシッシェ・ツァイトウング(新聞)。
 - * 37 Altgraf Salm-Reifferscheidを参照, 91ページ。
 - * 38 1870年7月19日-1871年5月10日。
 - * 39 王立学籍登録委員会によって1869年9月21日にベルリンで発表された。
 - * 40 Daudetを参照, 117ページから154ページまで。
 - * 41 § 41 すべての科目において少なくとも2つの講義を聞かなくてはならない。§ 45 1838年には9人, 1887年には14人の正規の教授がいた。§ 53 教授は3日以上大学を離れてはならない。§ 70/71 学籍登録料は1ターラーで、これは学部長個人のものとなる。学部長は学生の記念帳を作らなければならない。公印およびサインによってSignum Fakultatis (証明書)が発行されるが、現在は残念ながら存在しない。
 - * 42 Tentamenとは予備試験を意味する。進の記録においてもtentamen physicumと記されていた。本来であれば「優」もしくは「良」で合格すべきであるが、進は1872年、「可」を与えられた。彼が外国人であったことから、学部長が例外的措置を取ったと思われる。
 - * 43 進のテーマは“Descriptio anatomica orbitae”であった。
 - * 44 進の場合、試験参加の決定および確認は、試験に招待する書類にサインをするだけでよかった。
 - * 45 進が講義を受けた25人の講師のリストは、彼の博士論文の付記を参照。
 - * 46 1870年に死去したアルブレヒト・フォン・グレーフェの記念碑(墓)もそのすぐ隣にある。彼の死後5年後、この通りはグレーフェ地区と名づけられた。進が彼らの師とともにこの墓を訪ねたことが想像できよう。
 - * 47 Schleich, 153ページ。
 - * 48 Schleich, 155ページ。
 - * 49 Schleich, 154ページ。
 - * 50 Schleichを参照, 158から159ページ。
 - * 51 ランゲンベックによって様々な「ランゲンベック手術器具」が發明され、これらは現在でも使用され、販売されている。
 - * 52 森田を参照, 168ページ。
 - * 53 1878には外科および眼科クリニックを開設するために大規模な改装工事が行われた。300 Jahre Charité (「シャリテの300年」を参照)。
 - * 54 森田を参照, 89ページ。
 - * 55 Feylを参照, 78ページと92ページ。
 - * 56 Feylを参照, 88ページ。
 - * 57 Feylを参照, 77ページ。「1910年10月13日, ウィルヒョウの家族は毎時間ごとに祝電やお祝いの手紙が届くため、2つの洗濯かごを玄関のドアの前に置いておいた」。
 - * 58 進のほかにも60人の日本人医学者、名前の綴りはおかしいが、たとえば“Dr. Riutaro Mori”や軍医総監“Dr. Tadanori Ishiguro, Generalstabsarzt”侍医の“Dr.

Sankey Hagiwara, Leibarzt”などが名を連ねた。このリストはシャリテの医学歴史博物館で保管されており、ベルリン森鷗外記念館にもそのコピーがあり、日本人全員がエクセルのデータに納められている。

- * 59 ドイツ公共健康管理協会(1872年)創立メンバーの1人。1886年、日本政府は東京の水道計画の技術顧問としてホープレヒトを招き、87年まで滞在した。下水網を作ることに関しては、この時点ではやめるようにアドバイスしていた。
- * 60 1870年6月29日付、フォッシッシェ・ツァイトゥング(新聞)、4ページ。
- * 61 1873年7月には3人目のドイツの医学者、解剖学者のフリードリヒ・カール・ヴィルヘルム・デーニッツ(1838-1912)が日本に到着した。
- * 62 鮫島尚信(1845-1880)。
- * 63 新島襄全集第6巻、同朋舎、京都1885年、124~125ページ。
- * 64 当時における江戸のアルファベット表記はJeddoもしくはYeddoであった。
- * 65 今日の基礎過程終了に相当する。
- * 66 出版物に、Der Bau des menschlichen Gehirns(『脳の構造』など)Leipzig, 1859.
Young-Ok Kim: Karl Bogislaus Reichert (1811-1883): sein Leben und seine Forschungen zur Anatomie und Entwicklungsgeschichte. Univ. Mainz, Diss., 2000.
- * 67 谷紀三郎を参照、530ページ。
- * 68 森田、96ページの15行目から98ページの12行目よりの抜粋。『順天堂史』上巻を参照。
- * 69 久米邦武、特命全権大使米欧回覧実記を参照。
- * 70 アンドレアス・ヴィンケルマン氏からの2012年10月25日のメール。
- * 71 Das anthropologische Material des Anatomischen Museum der koeniglichen Universitaet zu Berlin. (Schriftenreihe: Die anthropologischen Sammlungen Deutschlands; Hg. H.Schaafhausen). Erster Teil zusammengestellt von Dr. G. Broesike in Mai 1880. Braunschweig: Vieweg und Sohn. 1881. [VIII+78S.] p.32/33.
- * 72 この頭蓋骨の現在の所有者はベルリン国立博物館、先史・古代史博物館—プロイセン文化財財団(略称SMB-SPK.MVF)である。撮影者はホルスト・ユンカー。撮影は先史・古代史博物館の依頼を受け、ベルリン人類学・民族学・原史学協会(BGAEU)により行われた。
- * 73 岩倉使節団は1871年12月23日に横浜を発ち、3月7日から28日までベルリンとポツダムに滞在した。
- * 74 「^{あした}此晨ニハ白霜野ニシテ、寒気頗る凜タリ、七時ニ伯林ノ駅ニ達スレハ、在府ノ辦務使、書記官、及ヒ在留学生マテ、ミナ駅ニ出迎フ、日耳曼^{ゼルマン}国人ハ、帝王ヲ尊敬シ、政府ヲ推奉スルコト、甚タ篤シ、故ニ本国使節ノ来^{きたる}ヲキキ、留学書生ヘハ、其教師ヨリモ、^{ことさら}故ニ休暇ヲアタヘテ、其公館ニ伺候セシメ、在鄙ノモノモ、遠ク此府ニ集来シ……」久米参照。336ページ。
- * 75 Kume(独訳版)を参照。44ページから110ページまで。
- * 76 『独逸日記』1884年10月13日。
- * 77 1874年11月18日付両親宛手紙。
- * 78 石原、76,88ページ参照。
- * 79 1874年7月17日フォッシッシェ・ツァイトゥング(新聞)。
- * 80 フォッシッシェ・ツァイトゥング(新聞)1874年7月22日。
- * 81 フォッシッシェ・ツァイトゥング(新聞)1874年7月

28日、第2付録、「アジア」欄。

- * 82 フォッシッシェ・ツァイトゥング(新聞)1874年8月4日、第2付録、「地方版」。
- * 83 Königlich privilegierte Berlinische Zeitung von Staats- und gelehrten Sachen (Vossische Zeitung). 2010年の合同シンポジウムで筆者が初めて紹介した。

参考文献

- 1) Altgraf Salm-Reifferscheid, Niklas: Aoki Shūzō - ein Diplomat als Brückenbauer zwischen Deutschland und Japan. In: Ferne Gefährten/150 Jahre deutsch-japanische Beziehungen. Publikation der Reiss-Engelhorn-Museen Band 43, Mannheim, 2011: 91~93.
- 2) Briefe Satō Susumus aus Berlin: ベルリンからの佐藤進の手紙 順天堂大学の酒井シズ教授のご好意でコピーを使わせていただいた。
- 3) Brückenbauer: Pioniere des japanisch-deutschen Kulturaustausches/日独交流の架け橋を築いた人々。ベルリン日独センター 2005年。佐藤進については198~205ページ。
- 4) Daude, Paul: Die Königl. Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin. Systematische Zusammenstellung der für dieselbe bestehenden gesetzlichen, statutarischen und reglementarischen Bestimmungen. Bearbeitet von Universitätsrichter Dr. Daude. Verlag von H. W. Müller, Berlin 1887.
- 5) 300 Jahre Charité. (『シャリテの300年』) Hrsg. Claudine Hengstenberg. Fastbook Publishing, 2009.
- 6) Ferne Gefährten: 150 Jahre deutsch-japanische Beziehungen. Begleitband der Sonderausstellung in den Reiss-Engelhorn Museen Mannheim, Herausgegeben von der Curt-Engelhorn-Stiftung für die Reiss-Engelhorn-Museen und dem Verband der Deutsch-Japanischen Gesellschaften. Publikation der Reiss-Engelhorn-Museen Band 43, Schnell und Steine, Regensburg; 2011.
- 7) Feyl, Renate: Bilder ohne Rahmen. Greifenverlag zu Rudolstadt, 1977, 4. Auflage: 1985.
- 8) 福澤諭吉: 福翁自伝。新日本古典文学大系 明治編10 福澤諭吉集。岩波書店、東京; 2011.
- 9) Hartmann, Rudolf: Japanische Studenten an deutschen Universitäten und Hochschulen 1868-1914, Mori-Ōgai-Gedenkstätte, Berlin; 2005.
- 10) Hartmann, Rudolf: Lexikon-Japans Studierende in Deutschland 1868-1914. <http://crossasia.org/digital/japans-studierende/>
- 11) 長谷川泉: 鷗外「キタ・セクスアリス」考。明治書院、東京; 1968.
- 12) 石原あえか: ドクトルたちの奮闘記。ゲーテが導く日独医学交流。慶應義塾大学出版会、東京; 2012.
- 13) 『順天堂史』学校法人順天堂編: 順天堂史 上巻。東京; 1980.
- 14) Käser, Frank: Medizin nach deutschem Muster. In: Ferne Gefährten, 2011: 113~117.
- 15) 小堀桂一郎: 森鷗外と山縣有朋: 明治の終焉まで(島田良二教授御退任記念献呈論文)。明星大学研究紀要第6号。明星大学日本文化学部言語文学科、東京; 1998.
- 16) クラウス。E. 比企能樹: 日独医学交流の三百年。シュプリンガー出版、東京; 1992.
- 17) Kume, Kunitake: Die Iwakura- Mission. Das Logbuch des Kume Kunitake über den Besuch der japanischen Sondergesandtschaft in Deutschland, Österreich und

- der Schweiz im Jahre 1873. Übers. und hrsg. von Peter Pantzer, Iudicium-Verlag, München ; 2002. (久米邦武著『特命全権大使米欧回覧実記』<1973年>の独訳)
- 18) 久米邦武:特命全権大使 米欧回覧実記. 第五十七卷「伯林府総説」. 岩波書店, 東京 ; 1997.
- 19) 森田美比:外科医佐藤進—近代日本の歩みメスで支える. 常陸太田市発行, 1981.
- 20) Saaler, Sven/ Spang, Christian W. / Wippich, Rolf-Harald : Die Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens (OAG). In : Ferne Gefährten, 2011 : 185~187.
- 21) Schleich, Carl Ludwig : Besonnte Vergangenheit. Lebenserinnerungen. "Unter Bernhard von Langenbeck in der Ziegelstraße" S. Ernst Rohwolt, Berlin ; 1921 : 149~159.
- 22) Steger, Brigitte : Inemuri. Rowolt Taschenbuch Verlag, Reinbeck bei Hamburg ; 2007.
- 23) 谷紀三郎:餐霞録. (大田第二高校所蔵 前掲『餐霞録』(さんかろく)). 1914.
- 24) The Authobiography of Yukichi Fukuzawa. Revised Translation by Eiichi Kiyooka. With a Foreword by Carmen Blacker. Schocken Books, New York ; 1972.
- 25) Zschocke, Helmut : Im alten Berliner Studentenviertel. Peter Lang GmbH, Frankfurt/Main ; 2012.

**SEARCHING FOR EVIDENCE OF SATÔ SUSUMU'S MEDICAL STUDY IN BERLIN, 1869-1874
THE DISCOVERY OF A SKULL 140 YEARS AFTER THE IWAKURA MISSION
AND A CUTTING FROM A GERMAN NEWSPAPER REPORTING
ON THE DAY OF SUSUMU'S GRADUATION**

BEATE WONDE*

*MORI-OGAI-GEDENKSTAETTE

When Juntendô University and Charité-Universitätsmedizin Berlin signed a contract of cooperation in 2011, this was one further step in the history of medical relations between Germany and Japan, which go back more than 300 years. Satô Susumu, the first Japanese who took an official degree of Doctor of Medicine in Germany, played an important role in the history of these medical relations.

What kind of city did he encounter, when he arrived in Berlin in October 1869 shortly before the outbreak of the Franco-Prussian War? Who were his fellow students and what were the requirements for a formal full 4-year medical study at the University of Berlin? Who were his eminent teachers and what were their special skills and their personal characters?

In contrast to Mori Ôgai, who left a detailed "German diary" in which he recorded his days in Germany more than one decade later (1884-88), there is little evidence of Satô Susumu's study in Berlin. Apart from Sato's certificates, which are kept securely in the archives of Humboldt University, there is a skull of a Japanese from Yeddo (Edo) in the skull collection in the Museum of Prehistory in Berlin. This might be the one that Satô ordered for his teacher, the anatomist Bogislaus Reichert, and which was presented by Ôkubo Toshimichi, a member of the Iwakura mission, in 1873.

Until recently, it was not known exactly on what day Satô Susumu sat his examination for his doctor's degree and how the graduation ceremony was held, but the author has found a newspaper cutting that reports on this historical event on 10th August, 1874, and shows that the ceremony followed the conventions of the University of Berlin at that time.

Beate Wonde, the author of this article, has given several lectures on German-Japanese medical history at symposia by Juntendô and Charité. That she also, as Curator of the Mori Ôgai Memorial in Berlin, shines a light on the various associations between Satô and Ôgai and on the footprints they left behind in Berlin, is not surprising.

Key words : Juntendô-Charité, German-Japanese medical exchange, Mori Ôgai, Satô Susumu, object history : skull find